昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成21年5月5日発行（毎月5日1回発行）
第49巻5月号（通巻598号）

風土

5

花辛夷

神蔵器

近きより遠き一樹の山桜

春蘭に涙をそそぎ吉野山出づ

金色の観世音菩薩雀の子

吹きおこる不断念仏鳥ぐもり

青邨亡し真正直に紫荊咲く

PDF= 俳誌の salon

蜥蜴出て大きな石の夢うつつ

奪衣婆のオン・ゾロ・ソワカ桜咲く

白き蝶白きまま死す草の上

のこる世はあそびをせむか花こぶし

初桜死者の体温奪ひ咲く

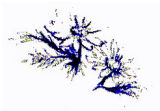
深大寺　二句

墓一つ紫すみれ白すみれ

花辛夷八十八世晋山す

PDF= 俳誌の salon

竹間集



同人作品

荒涼と

山田　暢子

五箇山に雪降るこきりこささら節
山深く流刑小屋あり雪明り
白山へ現れては消ゆる雪の川
雪吊に張りつめし空ありにけり
日溜りも潮の香のして二月かな
海荒れて北風の貼りつく千枚田
荒涼と海冴え冴えと狼煙台

迎春花

門伝　史会

阿夫利嶺に光る雪あり迎春花
錠剤の掌のくぼすべる余寒かな
返信はすぐに投函春立てり
草青む声変りして帰国の子
薄氷をかづきて鯉の影動く
観梅の富士快晴となりにけり
如月や手吹きガラスの淡き色

「淡交」以後(五)

野沢しの武

嬰の祭着畳めば一掬みほどに
ぢぢばばとちちははとやや庭花火
また一つ加齢原爆忌も吾も
（原爆忌六十三回目、吾もすでに八十歳）
盆礼者足腰弱る話せり
亡き娘はや五十路終戦日が忌日
稲妻を連れて遅れて男来る
飛入りの男手練の踊り振り

PDF= 俳誌の salon

春疾風

鈴木　石花

春立つや混み合つてくる予定表
九人の句会の宿や迎春花
鶯を待つ蹲踞の水満たす
春疾風三キロマラソン完走す
出所の知れぬ水漏れ凍て返る
常宿のこぢんまりしてきぎす鳴く
落第の報せ励ます涙溜め

明日の神話

山路　紀子

糸底の指にざらつく春の風邪
行進のシンバル一打風光る
岡本太郎「明日の神話」や春立てり
寄生木の数へて七つ春の空
針供養お納戸色に街暮るる
山裾のひようたん池や蝌蚪の国
草萌ゆる大地に立てて木の化石

菜の花

岩木　茂

グランドにひとり素振りの春隣
追儺会の鬼出でまして火の猛る
見た目にも鴨減つてゐる雨水かな
笹鳴きや障子の穴を日の洩れて
一番若布添へて法事の引出物
菜の花や佐分利の子らへ勉の書
星空へ炎消えゆく送水会

囀り

相沢有理子

春北風ひとしきり枝打ち鳴らす
囀りやカストロ帽の宅配夫
戻り寒遊女の墓に花を添ふ
凍て返る宵の漆のごとき空
牝馬勝つテレビ見遣りつさくら餅
春霖にくもる硝子戸絵文字描く
母子像の裳裾ふちどる遊蝶花

PDF= 俳誌の salon

根深汁

― 野沢しの武 ―

雨より雪に冬至一日人に会はず

冬至どか雪翌朝刊の総遅れ

今生のいまが数へ日少し酔ふ

厨なる老妻と賀詞交しけり

まだ生きるつもりかなどと賀状来る

ひとり独楽打つ子に声を掛けて寄る

綿虫や死は一言（ひとこと）に語られず

死を怖れ生を畏れて根深汁

一月の終のどか雪幾度も掻く

終日雪降るだけ降らし一月去る

山河集

同人作品

神蔵　器選

人の世の人に生まれて椿かな　天野みゆき

蟄虫の湯浴みせしごと出でにけり

春光や潦にも支流あり

哭くものを哭かしめ涅槃し給へり

鶯や桜皮茶筒のぽんと開く

雪山の暮れ際蒼し猪食ふか　十井　三乙

ハンガーに明日の喪服夜の凍(しば)れ

綿虫の一匹が目の底に棲む

海見ゆる茶房の椅子に室の花

ふるさとは遠くにありて日向ぼこ

春立つや机の上の世界地図　中村　洋子

下萌や透明に減るボールペン

約束の時間まで踏む薄氷

和泉式部ゆかりの

ほつほつと「軒端の梅」の蕊ひらく

下村観山の画

「弱法師」の杖の先なり臥龍梅

畦一つ跳んで建国日と思ふ　井口ふみ緒

白鳳仏の倚像(いぞう)ふたたびあたたかし

等身の鏡を磨く寒の明

かつて子の二階の部屋も豆を撒き

芹のこゑ薬師山より絞り水

梅ふふむ空に硬さのありにけり　林　いづみ

三月の瀬音岐るる中洲かな

亀鳴くや心経二百六十二

木の芽張る染色工房のティールーム

料峭の鐘の中なる師弟句碑

PDF= 俳誌の salon

◇特別作品◇（抄）

草萌ゆる

小林　共代

子規・波郷踏みし御城下草萌ゆる

薬師坂ひよどり坂の陽炎へり

萱寂ぶ蘭学通り風光る

花の絵のオフセット刷種物屋

山茱萸黄をふり零す武家屋敷

豆の花三百石の武士の庭

春の鵙土塁の高き大屋敷

料峭や戸棚に往古の鉤やメス

三代の廟所日の射し亀の鳴く

竹叢の囲む廟所や夕おぼろ

PDF= 俳誌の salon

風土独語／神蔵　器

蟄虫の湯浴みせしごと出でにけり　　天野みゆき

蟄虫とは、土の中に冬眠している虫のことである。そんな蟄虫、つまり冬の間、地中に蟄伏していた虫が、春の訪れに目覚めて地上に出て来る。これが春の季語「啓蟄」である。

啓蟄は虫たちにとって単なる目覚めではない。身のうちに蓄えていた栄養はぎりぎりまで使いはたし、生死の境に最後の力を尽くして、自ら動き、自ら戸を啓いて此の世に出ることで、新しい生命の誕生といっても過言ではないのではないか。人間の誕生の産湯のごとく、啓蟄の虫たちにも自然の讃歌、大きな恵みに湯浴みをしたごとくみずみずしく、且つ生き生きと濡れかがやいているのである。

なお、蛇や蜥蜴・蟇などの爬虫類や両棲類なども、冬眠し、春に目覚めて出て来るものは啓蟄である。

モヒカンの髪の二百羽春の鴨　　奥田　茶々

モヒカンはモヒカン刈り、もともとは北米先住民一族の男性の髪型であるが、日本でも芸能人や若者によく見られる。頭部中央の前から後ろへ一直線に髪を残し、両脇を全部剃り落としたものである。

句意は説明するまでもない。鳥類はメスは地味で、オスは派手、色彩豊かである。日本では流行の先端を行くような若い男のモヒカン刈りも、どうやら鴨に先を越されていたようだ。

紫野は御所の北西時雨来る　　間島あきら

この句を読んですぐ思ったのは、額田王の

茜さす紫野行き標野行き
　野守は見ずや君が袖振る（巻一、二〇）

皇太子（ひつぎのみこ）の答へませる御歌

紫草（むらさき）のにほへる妹を憎くあらば
　人妻ゆゑにわれ恋ひめやも（巻一、二一）

皇太子（大海人皇子）の返歌である。

額田王は、天智後宮に仕えていたが、初め大海人皇子に嫁ぎ十市皇女をうんでいる。どういうことでそうなったのかは知らないが、この歌の蒲生野に遊猟をされたのは天智天皇であり、その頃額田王は天皇の寵をいっしんに集めていた。そんな額田土の現在の身の上も顧みずに、皇太子は大胆にも大きく袖を振っている。王（おほきみ）は見て見ぬふり「野守は見ずや」とかるくとがめながらも人目を憚る心のうちをそれとなくあらわしている。

大海人皇子の返歌は「紫の色のような美しいあなたを、憎く思うならば、他人の妻ゆえの恋を、わたしがするでしょうか、いやいたしませんよ」と血を吐く心情を吐露している。因みに大海人皇子は後の天武天皇である。

さて、私は横道にそれてしまったが、掲出句の標野は「御所の

PDF= 俳誌の salon

北西」とあるから、平安京の大内裏に接した船岡山の東北一帯の地であり、昔から洛北七野（内野・北野・平野・萩野・蓮台野・紫野・上野）などがある。現在の今宮神社（京都市北区紫野今宮町）あたりを中心にした広大な野であったろう。朝廷の禁野といえば御所に最も近いこの紫野を指す。もしこの地に万葉の昔をしのぶ何かがあるなら教えていただきたい。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon

風土集

神蔵器選

氷の花田に置くアクション・ペインティング　横浜　安永　圭子

川岸の流木アートや冴返る

目つむりて臘梅に聞く明日かな

枯野道男無口のよかりけり

毛野みちの人影少な草青む

探梅の帰りのバスの遠さかな　東京　奥田　茶々

ゆうるりと回す石臼初音かな

春きざす雨や二夜の城下町

石ころを避けしバギーや草萌ゆる

モヒカンの髪の二百羽春の鴨

立春や十指にほぐす鉢の土　東京　柴田　久子

用足しに二月の町を三角に

靴を干す竿の両端山笑ふ

黄梅や図面地べたに測量士

猫柳雀は雀いろに飛ぶ

紫野は御所の北西時雨来る　藤枝　間島あきら

石臼の径の三尺嫁が君

白樺の裸木天へ道なせり

大歳のなかなか乾かぬ軸の墨

和泉式部に六字名号年惜しむ

春昼や頬杖に載す顔一つ　相模原　天野みゆき

立春大吉三畳で足る茶室かな

風ぐせに公魚釣りのたぢろがず

如月や来し方をまた行方とす

電車いまスイッチバック芽吹き山

行き過ぎてより紅梅のかをりかな　さいたま　金井　裕子

猫柳一夜に増しぬ水の嵩

流れゆくものなき川面春浅し

智恵子にはほんたうの空花辛夷

沢音のやがて水音山笑ふ

PDF= 俳誌の salon